

## 情報環境と欲望の社会学：子どもの「生きられる生活世界」をめぐって

古賀， 倫嗣  
熊本大学教育学部

<https://doi.org/10.15017/9013>

---

出版情報：生活体験学習研究. 2, pp.9-13, 2002-07-31. 日本生活体験学習学会  
バージョン：  
権利関係：



## 情報環境と欲望の社会学

—子どもの「生きられる生活世界」をめぐる—

古賀 倫嗣

### Sociology on Information and Desire

—Research on 'Living Life-World' of Children—

Koga Noritsugu

**要旨** 現代社会は、不断にリアルな現実環境が見失われ、「環境の疑似環境化」が進む。とりわけ、子どもたちの生活世界をみると、「仮想現実（バーチャル・リアリティ）」が重要な分析視点となっている。本稿は、子どもの生活世界の中心に存在し、彼らのアイデンティティを保証する携帯電話に注目し、「出会い系サイト」についてのホームルーム記録を基に、彼ら自身の言説でこの問題の検討を行なうものである。

**キーワード** 仮想現実（バーチャル・リアリティ）、疑似環境、情報化／消費化、携帯電話、アイデンティティ

#### 1. 「バーチャルな恋愛」と「リアルな犯罪」

21世紀は、『判事の妻』の犯罪」という衝撃的なニュースから始まり、それは「法曹界の『構造犯罪』」として幕が引かれた。

発端は、単なる「三角関係のもつれ」である。古川園子元被告(40歳)は、4年前から伝言ダイヤルで「ヨーコ、26歳」と名乗り、そこで知り合った男性会社員と、電話を媒体とする「愛人関係」に陥った。まさに、「夢見るヨーコ」のアイデンティティの確かさが、その場所にだけはあったのである。ところが、直接会うことのない（すなわち身体関係をともなわない）関係を続けるあいだに、その男性が別の女性と交際を始め、その事実を知ったことから、それまでの「不倫」は「犯罪」に転化することになる。「嫉妬の鬼」と化し、逆上した園子元被告は、相手女性宅の鍵穴への接着剤注入、子どもが通う学校での中傷のビラ配布、自宅や夫の会社への無言電話など、数多くの脅迫事件を起こす。きわめつけは、女性の携帯電話に送信されたメッセージである。「ジゴクニオチロ」「イッカゼンメツ」。子ども問題に関心を持つ読者なら、記憶にある文言だろう。

「佐賀バスジャック事件」である。プリペイド式携帯電話、ボイスチェンジャーなど、最新機器を駆使した「電話脅迫事件」は所轄の福岡西署の懸命の捜査により、容疑者特定の寸前にまでこぎ着けた。2000年12月28日のことである。しかし、捜査は正月休みを厳命されたまま、ストップをよぎなくされる。

古川園子元被告が、「普通の主婦」ではなかったことにより、この事件は21世紀の初頭を飾る歴史的犯罪として国民の多大の関心を集めることになった。園子元被告の配偶者は、こともあろうに福岡高等裁判所の現職の判事、古川龍一（48歳）であったからである。捜査陣に正月休みを命じた福岡地方検察局の山下永寿次席検事（51歳）は、12月28日午前古川判事を呼び出して捜査状況を伝え、唯一の物証であるプリペイド式携帯電話使用の事実の漏洩や遣り手の弁護士の紹介まで行なっていた。さらに、地検や地裁・高裁も関係資料を複写するなど、事件に深く関与していたことが明らかにした。

山下次席検事は、記者会見で弁明のためについたうそが次々に判明、地検や高裁のトップは逃亡を決め込

んだ。古川判事は「年休」と称して雲隠れした。3月、証拠隠滅を示唆した山下次席検事は「守秘義務違反」では不起訴処分となり停職処分を受けたのち、辞職した。もちろん、莫大な退職金が、この「犯罪者」にも支払われた。トップの責任を負うべき検事正は、減給処分に終わった。また、古川判事は戒告処分の後に辞職願いを提出したが、訴追請求を受け国会の裁判官訴追委員会が開かれ、審議の結果罷免を認めず、辞職願いが受理された。古川園子元被告は、公判ではそれまでの横柄な態度から反省の姿勢に、転換したものの、懲役2年（求刑懲役3年）の実刑判決が言い渡された。これにより、事件は収束した。

この事件を、もう一度その本質に振り返って考察してみたい。事件が社会に与えた衝撃は、第1に「法」という社会システムの根幹に関わる問題である。「弁護士」を信頼する人は確実に減ってきたが、「判事」と「検事」が一緒に「悪いこと」をするとは誰も思っていなかった。その信頼性が地に落ちてしまったことは、国民がもつ社会規範意識の在り方を根本から動揺させることになった。まさに「急性アノミー」と呼ぶべき社会状態の登場である。

第2には、「ヨーコ、26歳」を自称した「判事の妻」の「仮想現実（バーチャル・リアリティ）」に関わる問題である。「電話」という情報機器は、姿を見せることなく相手とのコミュニケーションを可能にする。「声」も、今回のようにボイスチェンジャーを使えば、簡単に変えられる。インターネットであれば、当事者の現実の存在はまったく見えてこない。「生身」を相手にさらすことなく「関係」することを可能にする情報機器の革新は、ますます「自称する仮想アイデンティティ」を生む。ここに、成立する「疑似コミュニケーション」をどのようにとらえたらよいのだろうか。そこに「自己存在の分裂」はないのであろうか。

第3に、私たちはこれまで「子ども—大人」の二分法で思考し、行動の規範をつくってきた。ここで提示された「社会関係のバーチャル化」事例では、すべての登場人物が矮小化され、まさに幼稚化していることに驚くことであろう。一般の判事、検事だけではなく、法曹秩序に君臨する最高裁判所、最高検察庁のエリート官吏を含めた幼稚化である。「法権力」が他の権力と根本的に異なる特性は、合法的に人間を殺す力能を持

つことにほかならない。「権力の道化師」と呼んでもよい、これら「法曹エリート」の構造犯罪には、一連の行為の「動機—遂行—結果」についての洞察もなければ、反省もない。あるのは、発達の途中で停止したままの規範意識といってよい。この事件の半年後、私たちは東京高裁判事・村木保裕（43歳）の「淫行・買春事件」で再び、そのことを思い知らされることになる。

「仮想現実」として流れる情報は、年齢や性別、さらには「個性」を問わない。社会学では、情報やメディアについて「送り手」と「受け手」という視点が強調されてきたが、暗黙のうちにそのいずれもが「大人」と前提されてきた。こうした従来の図式のなかには「子ども」の存在はなかった。本稿は、「浮遊する孤人」「漂流する家族」「解体する地域」という現代社会の存立システムのなかでメディアが生み出す、子どもにとっての「社会関係のバーチャル化」をとらえる基礎視角の検討を行なうものである。

## 2. 「情報化／消費化」の社会学理論

「オウム真理教事件」を分水嶺に、「世紀末的不安」意識は高揚し、あらゆる生活領域で「不透明性」・「不確実性」が深まりつつあった90年代後半、社会学者、見田宗介によって書かれた『現代社会の理論（岩波新書）』という本が大きな注目を浴びた。「情報化／消費化社会の現代と未来」という副題を持つ同書は、さしずめ「暗夜に航海する船にとっての灯台」というべき意味を持っていたのである。

見田は、環境と公害問題、貧困と飢餓など『『臨界』に生成する問題系』をとらえると同時に、資本制社会の「人間の社会の歴史の中での相対的な優位と魅力と、その未来に開かれてある原的な可能性」をきちんと評価すべきだと訴える。「現代の社会の理論は、この現代の情報化／消費化社会の、光の巨大と闇の巨大を、ともに見はるかすものでなければならない」、これが見田の基本的な視座である<sup>(1)</sup>。

それでは、「情報化／消費化社会」とは、どのような社会なのか、またその存立システムの歴史的意義はどこにあるのだろうか。

「〈情報化／消費化社会〉は、初めて自己を完成した資本制システムである。自己の運動の自由を保障する空間としての市場自体を、自ら創出する資本主義。人

間たちの欲望をつくりだす資本のシステム。資本制システムはここに初めて、人間たちの自然の必要と共同体たちの文化の欲望の有限性という、システムにとって外部の前提への依存から脱出し、前提を自ら創出する『自己準拠的』なシステム、自立するシステムとして完成する<sup>(2)</sup>。」

〈情報化／消費化社会〉に到達することによって、初めて生み出された「〈欲望のデカルト空間〉は、欲望が自然から自由であるだけでなく、欲望が文化からも自由であることをとおして実現する」のである。ここで「デカルト空間」とは『近代』という社会のあり方がその基底として形成してきた、『世界のみえ方』のわくぐみとしての、自由な空虚な無限性の形式としての空間のことであり、「情報の解き放つ欲望のデカルト空間」というべき『形式の自由な世界』が、『消費社会』の運動を保障する空間であり、運動を保障する空間として消費社会がじぶんで生成しつづける世界の形成」とされている<sup>(3)</sup>。

それでは、その運動の原理とは何か。見田は、「必要を根拠とすることのできないものはより美しくなければならぬ。効用を根拠とすることのできないものはより魅力的でなければならぬ」と、アフォリズムで答える。その魅惑性が「新しい欲望」を再生産することはいうまでもない。情報を通じて欲望を創りだすことが可能になった社会、それが資本制社会である。

それでは、「情報」とは何か。見田は、その機能を「認識情報（認知情報）」、「行動情報（指令情報）」、「美としての情報（充足情報）」に分類し、次のように言及する。「情報の意味は一般に、〈みえないもの〉、〈みえにくいもの〉を、〈みえるもの〉として（明確に）経験させていくことにある…。これらすべての目にみえないもの、みえにくいものに対する視力を獲得することが必要なだけけれども、それはこのように、測定し交換し換算しえないものへの視力、つまり〈かけがえのないもの〉についての視力を含まねばならないだろう。そしてこの〈かけがえのないもの〉という領域は、〈情報〉というコンセプトの可能性の核心にあるものでありながら、〈情報〉というコンセプトを越えてしまうほかはないという、逆説的な出口を開いていると思われる<sup>(4)</sup>。」

『情報化社会』というシステムと思想に正しさの根

拠があるのは、それがわれわれを、マテリアルな消費に依存する価値と幸福のイメージから自由にしてくれる限りにおいてであった。〈情報〉のコンセプトを徹底してゆけば、それはわれわれを、あらゆる種類の物質主義的な幸福の彼方にあるものに向かって解き放ってくれる。…けれども、情報の観念は未だ、現在のところ、消費というコンセプトの透徹がわれわれを解き放ってくれる以前の、効率的、手段主義的な『情報』のイメージに拘束されている<sup>(5)</sup>。」

ここで、〈情報〉と「情報」が厳密に区別されていることを確認することが重要であろう。〈情報〉は人間の欲望のなかにあるとともに、反転し「知と感受性と魂の深さの領野」に向かう運動としての観念であり、「情報」はマテリアルな消費に従属しそれゆえ無限に向かう欲望実現の手段として落とし込められている。「新しい生と世界のあり方の可能性」を切り開くためにも、「現実のダイナミズムの内に内在する論理」の解明が問われている。

### 3. バーチャルな環境と「生きられる生活世界」

「疑似環境」という概念を使って人間の適応行動を説明したのは、リップマン<sup>(6)</sup>である。彼は、人間は自分を取り巻く現実環境に向けて適応しているようにみえながらも、実は環境のイメージに対して適応していることを指摘、その象徴化された環境を「疑似環境」と名づけた。マス・メディアの発達は、リップマンの生きた20世紀初めの「疑似環境」への依存度をはるかに越えて、私たちの生活世界は「疑似環境」の上に構成されているといっても過言ではない。私たちの「知っていること」の多くは、実は「聞いたこと」であり「経験していないこと」である。メディアの提供する情報は、それが「事実かどうか」ではなく「いかにもありそうなこと」を判断尺度として採用される。「記号環境」、「コピー環境」という表現が示すように、ひとつひとつの「環境」は本質的に刻印されていたはずの個別性や私性を失い、均質化され社会的に通分され、それゆえ「共有」される。それだけではない。「環境」が「疑似イベント」として自立化することにより、「疑似環境の環境化」が生まれる。疑似環境が主語になり、生きた人間が述語になるのである。

リップマンのいう「疑似環境」は「バーチャルな生

活世界」のことである。リアルな現実環境に対して、それは現実の一部を過剰に強調するものであったり、反対に過小に映し出すものであったりする。リアルな環境(社会)認識は、まさに「五感」というきわめて人間的な直接的感受性に基づくものであったが、バーチャルな環境(社会)認識は、メディア、すなわち「媒介するもの」に基づく間接的認知に変質する。

日々進行する「情報環境の変質」と、それがもたらす「社会関係のバーチャル化」は、子どもと大人の区別を超えて社会問題化している。

最後に、携帯電話(ケータイ)の利用を事例に「社会関係のバーチャル化」の問題を提示することにしよう。1999年9月末のデータではあるが、九州管内でインターネットへの接続機能を持つ携帯電話の加入者は約210万人、半年足らずで2倍以上に急増、携帯電話に占める比率は4割になっている。また、小学5年生から中学2年生を対象とした首都圏での調査では、自分用の携帯電話の所有率は25%(小学生だけでは19%)となっている。つまり、「情報」にアクセスする機会は、大人も子どもも変わらないという状況が生まれている。それだけではない。大人にとって携帯電話は少なくとも「道具(ツール)」以上のものではないが、子どもたちにとっては「自己のアイデンティティ」そのものになっている。女子高校生(コギャル)がよくいう「ケータイがなくなったら死んじゃうよ」などという発言は、そうした同一化意識の表現であり、実際に携帯電話がなければ、子どもたちは「親友=メル友」ともコミュニケーション不能になり、いわば「社会的孤立」に陥ってしまう。病的なほど「孤立」を恐れる、現代の子どもたちの実態を考えれば、確かにコギャルの発言はアイデンティティに関わる重要な事実である。本稿で、携帯電話を事例にするのはこうした「子どもたちの生活世界」におけるその比重の大きさに注目するからである。

熊本県のある商業系高校が、2001年11月発行した「性と生の学習」という、ロングホームルームの記録がある。タイトルが「性の社会問題 情報社会の落とし穴～出会い系サイトに潜むワナ～」というものだが、これを素材に携帯電話が広げる「子どもたちの生活世界」をのぞくことにしてみよう。

まず、最初に、LHRでこの問題を扱うことになった

趣旨を記そう。

「情報化社会といわれる現代、インターネットや携帯電話の普及に伴い、とても便利な世の中になりました。しかし、その反面匿名性を悪用した各種犯罪が生じているのも現実です。最近話題の出会い系サイトは、各方面・各地方にわたる知人・友人を見つけられる等、自分の交遊関係を広げる上でとても有効な面もある反面、殺人事件のような凶悪犯罪に発展しているケースも少なくありません。そこで、今回のLHRでは、出会い系サイトに潜むワナとして、その危険性や男女の出会いについて考えてみました。」

ここで確認しておきたいことは、出会い系サイトについて、それ自体に問題があるという理解ではなく、「知人・友人を見つけられる」というメリットを踏まえたいうえでの議論ということである。この議論の進め方では、携帯電話の所有は前提とされ、ただその使い方に気をつけようという枠組みになる。

議論を進めるための資料として、同校3年生を対象としたアンケート調査の結果が紹介されている。それによると、回答した217人のなかで「(出会い系サイトに)アクセスしたことがある」と答えた生徒は12.4%となっている。その理由としては、「ひまだった」66.7%、「好奇心」59.3%の2項目が高く、「からかい半分」18.5%、「彼氏彼女をつくろうと思って」14.8%、「友だちが欲しくて」7.4%などが続いている。この結果からは、やはり出会い系サイトが「ひま」「好奇心」を条件に関わる、日常的な生活世界として認識されていることがわかる。しかし、もっと重要なことは、「彼氏彼女をつくろうと思って」、「友だちが欲しくて」といった、低い数値で出ている項目にみられる、魅惑的なコンテクストである。恐らく、アクセスする現実的動機は、この文脈にあると思われる。

12.4%という利用率が高いのかどうか、高校生全体を代表するものか、そうしたことはここではどうでもよい。問題は、高校生が「出会い系サイト」とどのような関係を持つようとしているか、あるいは持ちたくないのか、そのことに関する生徒自身の言説を明らかにすることだからである。それを「感想より」からみてみよう。

A 「世の中にこんなに大勢の人が出会い系サイトに

アクセスしているなんて、びっくりした。出会いは、そうやって見つけるものではないと思う。寂しさや悲しさを紛らわすことができたとしても、それは一時的で、もしかしたらサイトにアクセスしたことでもっと今以上の寂しさ、悲しさを味わうことになるかもしれないと思う。」

正論である。多分、子どもたちにこう考えてほしいと、大人が思っている典型的な感想だろうが、それゆえ、「子どもたちの生活世界」が見えてこない感想でもある。

B 「私自身、出会い系サイトを利用したことがあります。最初は好奇心からだったけれど、こういう話を聞いたりビデオを見たりすると怖くなります。今はもう利用していません。出会い系サイトに純粋に出会いを求めている人もいます。それを悪用する人は許せないと思いました。」

「純粋に出会いを求めている人もいます」という認識を持っている子どもたちがいる事実が、ここに確認される。それを「悪用する人」がいるから悪いという判断である。この生徒は、「悪用する人」がいないことになっている、別のメディアで同じ失敗をすることであろう。システムの問題を人の問題にすりかえてしまったからである。

C 「出会い系サイトは本当のことがわからないから怖いと思った。出会い系サイトは架空の世界みたいだ。それを現実に持ち出すと怖いことが起きるのかなと思った。出会い系サイトで真実のことが書けるならいいけど、誰でも自分の欠点は言いたくないから、架空の世界になるのかな…。」

この感想は、きわめて興味深い。「架空の世界」、すなわち「バーチャルな現実」がそこにあることに気がついている。そして、もっと興味深いことは、なぜそうなるのかと自問し「誰でも自分の欠点は言いたくないから」と分析していることである。もちろん、その見方の浅さを批判することは容易であるが、むしろ子どもたちにとって「バーチャルな現実」を自ら創りだすとき、「欠点」としてしか意識されることのない「自

己アイデンティティ」がその起点となっていることに注意したい。冒頭の高川園子元被告が「ヨーコ、26歳」となぜ名乗ってしまったのか、それを明らかにする視点がここにあるからである。

とはいえ、もっと鋭い指摘が子どもたち自身からなされている。次の「感想」をみると、見田のいう、「生産する蜜蜂から消費する蜜蜂へ。労働する蜜蜂から欲望する蜜蜂たちへ」という、資本制社会システムの巨大な転回、「情報による消費の創出を常態とする時代」とはいったい何であったのか、それが子どもたちの「言葉」で告発されている。

D 「何でもすぐ、金に結びつく商売をするんだなーと思った。」

本稿は、「浮遊する孤人」「漂流する家族」「解体する地域」という現代社会の存立システムのなかでメディアが生み出す「社会関係のバーチャル化」を明らかにする研究のなかで、基礎視角を検討するものと位置づけられる。携帯電話は、「浮遊する孤人」の居場所にほかならない。それが「居場所」であり続けるか、それとも「逃げ場所」になってしまうのか、その「浮遊」の行方が、次の問題である。先のLHRのとりまとめが、教師によって「友達をつくることは大切なこと、でもそれを悪用する人がいることを忘れない」としか総括できない現状は、問題の陳腐化を生んでいる。「子どもたちの生活世界」に内在的に迫ってその「バーチャル化」を明らかにすることの重要性と緊急性を私たちに訴えているのである。

#### 引用文献

- (1) 見田宗介『現代社会の理論』岩波書店 1996年 ii頁。
- (2) 見田 『同書』31頁。
- (3) 見田 『同書』27～28頁。
- (4) 見田 『同書』164～165頁。
- (5) 見田 『同書』170頁。
- (6) リップマン(掛川トミ子訳)『世論』岩波書店 1987年。